

(23) 楡の会発達研究センター報告、その23 (2012年1月)

学校で暴力を振るっていたが“好い事作り心理療法” によって3年生になって落ち着いた男児

楡の会こどもクリニック

石川 丹

要旨

児は暴れた時に担任に羽交い絞めにされて以来恨みが有ると言い、担任の先生を殴る蹴る嘔む等の乱暴を働き、授業に参加しない、級友への攻撃など問題行動を繰り返した。心的トラウマのみならず本児の性格特徴に対する対応の不適切さが行動をエスカレートさせていた。特別支援教員に対して受容を第一とした“好い事作り心理療法”を指導した結果、問題行動は消失した。改善過程の精神医学的考察によって、児が支援教員を安全基地としつつ“自己の対象化”を獲得した点が良好な結果の要因であったことが分かった。

I 初めに

筆者は子どもが不適応行動を起こすと、癩癩、我が強い、腕白、我が儘など性格要因を検討する以前に、障害か？という議論が先行する近年の子育て文化に懸念を抱いている。

最近の心理学における性格研究は外向性、協調性、勤勉性、情緒安定性、知性の5因子説によって議論されている。本児は、外向性の変動が激しい一方、残りの4因子にも多くの問題があったため著しい逸脱行動を生じた。しかし、“好い事作り心理療法”によって性格の改善がなされた。

II 児童

1. 初診時、7歳0ヵ月(小学1年生)男児、就学5ヵ月後。
2. 父母は学校で手に負えないと言われ、児童相談所に行ったらアスペルガー症候群の疑いがあると言われたので対応の仕方を知りたい、と要望して来院して来た。
3. 家族構成は父30歳、母31歳、弟3歳の4人家族。
4. 初診時面談：学校ではやりたいことしかししないで勝手な事をすると言われていて家とは全然違う。本人は「3ヵ月前、友達と喧嘩して鉛筆で相手の腕を刺した時、担任の先生に怒られて暴れたら先生に後ろから羽交い絞めにされた。それで先生が嫌いになった、先生に恨みが有る。」と述べた。
5. 学校からの紹介状：やりたくないことそっぽを向いて知らん振りする。授業中に机をひっくり返した。観察授業では「やりたくありません」と言ってしないので質すと「僕は

心が弱いから」と答えた。「書けない、僕はダメ人間だ」と言ってノートを破いた。いたずら書きを注意した友達に「馬鹿、この野郎」と暴言を吐きノートを投げつけて泣かせた。担任を蹴る毆るして「死ね、包丁で刺してやる」と言った。道具をしまうように指示された途端に担任を叩く噛みつく行為に及び、一暴れした後で頭痛を訴え保健室に行ったが、養護教諭には穏やかに「忙しいとこ申し訳ありません」と挨拶した。授業中は鍵盤ハーモニカを弾かないが、終わった途端に得意気に弾き出す。割り込みを担任が注意した時、暴れたので校長室にタイムアウトさせたところ、校長には「校長先生さようなら」と笑顔で挨拶し何事も無かったように退室したので校長もびっくりした。

6. 成育歴：乳児期、寝つきは良くタオルっ子では無かった。言葉の遅れは無く、強い同一性保持要求も無い。保育園では弟より聞き分け良く友達ともよく遊んだ。描画が上手く出来ないと途中で止めて自分の頭を叩いたり、「僕はダメなんだ」と言う事があった。大泣きすると顔が青くなった（これは自律神経不安定症状であり、本児のストレス閾値が低い事を示唆する）。自家中毒を2回した（自家中毒は神経症の一型である）。

7. 心理検査：児童相談所実施のWISC-IIIでは、全IQ110、言語性IQ116、動作性IQ101、言語性と動作性のディスクレパンシーは15であったが下位検査の大きなばらつきはない。“小さい子が喧嘩を仕掛けて来たら”に対しては「喧嘩やる」と即答し、攻撃性の強さが目立った。

8. 父母への説明：アスペルガー症候群とは違う所があります。我が強く、しつこい所もあるが気紛れもある子。自分を責めることもあります。何で自分が悪いんだ」と自己主張し自分を守ろうとする所もある子です。癩癩を起こし易く、拗ね易い点もあります。乱暴して先生に強く叱責された事が心理的トラウマになって今の問題行動を起こしているのが神経症に相当します。大人の心理療法的関わりが大切です。両親がこの子の気持ちや思いを代弁して言い、この子に「お父さんお母さんは僕の事が分かっている、味方だ」という気持ちを作ることが第一の心理療法です、と“受容”の大切さと“好い事作り心理療法”を説明した。

III 経過

7歳1ヵ月；担任A先生と教頭が来院。教頭は「長く教員をしているがこんな子は初めて、この子は変わるのか？」と質して来た。学校側にも本児の個性の特徴を説明し、注意したり叱る前に、例えば「やりたくないんだ」「ノート破りたいんだ」「出来なくて落ち込んでんだ」「テンション上がってるよ」等その時の本児の気持ちや意図を言い当ててアナウンスし、この子の心の中に「先生は分かってくれてる」という思いを作して下さい、と“好い事作り心理療法”を説いた。こちらがお願いする心理療法を徹底すれば改善し得る、と見通しもお話しした。通院治療に当たっては学校での逸脱行動を正確に把握する必要があるため、日誌を親に持参させて欲しいと要望し学校側の了解を得た。

父母と相談して乱暴行為に対する薬物療も併せてすることにした。

7歳2ヵ月：特別支援教員B先生が常時近くようになった。乱暴は目立たなくなり、当番もするようになった。気を取り直すのが早くなった。しかし、A先生に「今はそれではない」と否定されていじけるのはある。教室を飛び出した後、友達が「A先生がおいで、と言ってる」と言いに行ったが、「A先生が僕を気遣ってくれる筈はない」と言って教室に戻らなかった。飛び出した本児にB先生が「君の気持ちが切り替るまで付き合うから」と声掛けしたところ、すうっと教室に戻れた。体育の時間に器具室で遊んでいて授業参加が遅れるのでB先生が質すと、「気になってどうしても触ってしまう」とのことだったので、B先生が「少し触ったら授業に戻れば良いんだよ」と受容的な声掛けをしたら、次の体育では触ってもすぐに止められた。

7歳3ヵ月：授業参加は増えたが勝手な行動はまだあり2時間続く事もあった、「僕は特別だ」と言って我が儘を続けるとの事であったので、B先生に認知療法と外在化療法を説明し、“この子だけ特別”を教室全体のコンセンサンスにした方が教室運営はスムーズになるはず、と説いた。その後、日直の号令に対して「機嫌が悪いのでやりません」と言いながらも授業に取り組んだ。C君を殴ったり引っ掻いたのでB先生が理由を問うと、「C君の顔を見て、僕を馬鹿にしていると思ったから」と述べた。スキー授業中、前の子をストックで突っつくのでB先生が注意したところB先生に殴り掛かった。

7歳5ヵ月：「B先生が『苛々を止めるパワーストーンよ』と言ってくれた」と石を見せながら「これで苛々虫を抑えている」と友達に言った。これはB先生の認知療法が奏功した証拠である。教室で寝転ぶのでB先生が抱えながら教室から出た時は満面の笑顔であった。授業で寝転がったのでB先生が「赤ちゃんだから座れないんだ」と声掛けすると「赤ちゃんじゃない」と言って席に着いた。卒業式の練習後、「僕頑張ったでしょう、花丸何個？」とアピールして来た。B先生への依存が高じ、先生が離れると附いて来るようになった。筆者は、依存はB先生が安心基地であるとの認識の結果であり一過性でその後に自立が来るはず、と説明してB先生を励ました。B先生がM君と雪でかまくらを完成させたところ雪玉をぶつけて壊そうとした。これはB先生が他児に関わったので嫉妬しての攻撃行動と考えられた。友達を殴って一度は謝ったが「やっぱり僕は悪くない」と言った。指示に従わない本児をB先生が説得している様子を見たC君が含み笑いした所、休み時間に待ち伏せして思いっきり叩いた。A先生が終了の合図をすると「A先生が僕の邪魔をした」と怒って飛び出し、テスト中には「間違ったらA先生に殺される」と言った。A先生に三回呼ばれて漸く取りに行った時、「すぐ受け取ってね」と言われた途端に教室を飛び出して廊下で泣いた。A先生への反発は強い。本児が自己紹介している間に他児の私語をA先生が「ちょっと黙って」と注意した所「A先生は僕に自己紹介させてくれない」といじけて怒った。しかし、自己紹介は続けられ、進歩が認められた。

7歳7ヵ月：2年生に成った。上手く行かないと「僕、今日機嫌良くない」「僕の心の中に逆人と正人が居る」と言うようになった。これは、本児が自己の対象化と客体視がかなりできるようになった事を意味する。拗ねる度に教室の角に椅子を持って行きたがるよう

になった。これは、その場ではなく場所を変えられるように成ったという事を意味するので、やはり進歩である。

7歳8ヵ月：問題行動が増えたので、B先生は教室の角に衝立を置きクールダウンスペースとした。これはタイムアウト法という心理療法の一つである。忘れ物をした時A先生が「忘れた人には違う事をやってもらいます」と言うと怒って廊下でごろついた。ラジオ体操をダラダラしながらも崩れる事無くやれた際、A先生に「頑張ったね」と言われたが「でも僕フラフラしちゃったから」と自己の対象化が出来た。「A先生なんか嫌いだ、消えろ」と言ったので「人に聞こえないように小さな声で言うと、注意されないよ」とB先生が声掛けすると、本当に小さな声で呟いていた。これは憂さ晴らしを密かにするという大人のストレス解消方法の芽生えで、これも進歩である。B先生が示唆した“小さな声で”では“好い事作り療法”の内の“やっても無害”に相当する。B先生が傍について指導していた時、A先生が「一人じゃ問題解けないんだ」と言った途端に一人でやり始めた。児はA先生の皮肉にめげずに自立の道を進められた。

7歳9ヵ月：A先生が隣りの子に注意したところ顔色を変えたので、B先生が本児には注意してないと仲介したが顔を歪めて席を立とうとした。日直当番の際、「D君が睨んで来たからやらない」と言って怒り出した。廊下でいきなり3人の級友を殴ったので、理由を質すと「3人が裏切ったので報復として殴った、僕は悪くない」と主張した。

7歳10ヵ月：飛び出しても戻るのが早くなった。テスト中泣き出したのでB先生が質すと「間違えて悔しい、僕は悪い子だ」と反省できた。

7歳11ヵ月：2学期に成って授業参加が増えた。A先生に注意されて不貞腐れている所を1年生に笑われ、「お前らなんか殺してやる」と殴り掛ってB先生に止められた。その後、クールダウンスペースで「今出たら1年生に復讐してしまうからここで落ち着いてるんだ」と言った。これは自己制御の心が発達した事を意味する。怒られた後「僕、夢中になると人の声が聞こえなくなっちゃうんだ」と反省し自分を振り返れた。B先生がフォローに廻った時A先生に「お殿様なんだね」と皮肉られたが、怒らずに笑ってられるようになった。一人で出来た時「僕、ちょっとずつ出来るようになった」と自信を示した。

8歳1ヵ月：気紛れが少なくなった。初めての事でも涙ぐみながらチャレンジする。B先生がべったり附かなくても大丈夫になった。E君に意地悪な事を言ったFさんに「Fちゃん、それ意地が悪い」と言葉で諫めたのみで、手は出さなかった。薬物は中止とした。

8歳3ヵ月：母親は、A先生から「最近は殆ど手が掛らない」と褒められた、と述べた。隣りの子がゴミいじりを続けていたのでA先生が「ゴミ箱に捨てなさい」と指示した所、手にしていた教科書をゴミ箱に捨てた。体育の縄跳びの駆け足跳び課題の最中にA先生に「それは走り跳びだよ、駆け足跳びするんだよ」と注意され泣き崩れた。雪玉をぶつけられてもやり返さなかった。「死んでやる」は言わなくなった。

8歳5ヵ月：「学校、楽しい」と言うようになった。プイと教室から出て行くのは無くなった。状況が読めなくて動けない時に友達が声を掛けてくれると「ああそうかあ」と受け

入れられるようになった。苦手も最後まで取り組む。当番や係をこなす。友達や A 先生への敵対意識は無くなった。

8 歳 8 ヶ月：3 年生になって B 先生は殆ど附いてない。母は、新しい担任の G 先生に「聞いてた話と全然違う」と言われたと言って喜んだ。

8 歳 9 ヶ月：全体的に大分大人になった感じだが、作文の時間に上手く書けずに転がってしまい B 先生と一緒に図書館で書いた事があった。

8 歳 11 ヶ月：学校からは特別何も言ってこない、と母は述べた。

9 歳 1 ヶ月：学習発表会はきちんと参加した。

9 歳 4 ヶ月：母は筆者に「校長が落ち着いてしっかりやっています」と言っていたと笑顔で報告した。算数理科はすごく出来て、国語の文章題も得意だが、漢字が汚いので居残って練習している、とのこと。

10 歳 0 ヶ月：特に問題はないとの事であった。

IV 考察

本児は性格の 5 因子論によれば、積極的だったり拒否的だったり気紛れ、自己中心的、気分不安定、怒りっぽい、じっくり考えるのが苦手、ということになるが、更には、敵意帰属バイアスが高い 即ち、他人の言動を悪意に取り易い（邪推し易い）攻撃し易い、また、思い込みが強い、執念深い、直ぐ出来ないと思ひ易く、いじけ易い、自己卑下し易い、など多彩に偏倚が大きい特徴を持っていた。

相手の言動を悪意に取った時の攻撃性と出来ないと思った時の自己卑下の振幅の大きさこそが、本児の逸脱行動の誘因だったと考えられる。教頭の「こんな子初めて」発言がその事を象徴している。

本児の性格特徴が一举に顕在化して不適応行動を招いた要因は、本児のプライドを危うくした「羽交い絞め」事件、にあった事は明らかである。幼児期に問題が無かったのは、保育園は自由遊びが主であり、学校教育では規範規制が保育園より強くなったからである。

特別支援教員の日誌からは担任の先生の指導の厳しさが窺われた。この点为本児の性格特徴を刺激して問題行動を促進したと思われた。本児の言動には担任への邪推と反発といじけが顕著に表れ、恨みは相当深く刻印されてしまっていた。

特別支援教員は“好い事作り心理療法”に則ってよく声掛けした。例えば、「少し触ったら授業に戻れば良いんだよ」は“先ずは君流で好いよ、でも～したらもっと好い”に、「苛々を止めるパワーストーンよ」は“安心グッズ作り”に、「小さな声で」は“やっても無害で”に相当する。こうした受容的関わりの結果、児の心の中に、抱えられて教室から出された時の満面の笑顔、先生が離れると附いて来る、などに象徴される支援教員への依存を生み出し、安心が醸成された。この安心にこそ担任による厳しい指導に対して反発したり挫けたりすること無く上手に対応できるようになった原動力が有った。支援教員が本児にとっての安心安全基地に成ったからこそ、我が強く気紛れな本児がストレスフルな

学校生活を上手くこなせるようになった。初めは支援教員が傍に居ないと安心が確保されなかったのを後にくっ付いて歩いたが、安心の確信が強固に成るに連れて支援教員が現実的に傍に居なくても「心の中に居るから大丈夫」と思えるようになり、支援教員がべったりくっ付いて居なくても自立して適応行動を取れるようになった。支援教員が丁寧に関わり、児に“出来ちゃった”感を醸成して自信と自尊心を生み出し、その結果、自分の行為を自慢したり謙遜したり出来るようになったからこそ学校生活に適応できるようになった。

自己の対象化が出来るようになった事を意味する発言が増えた点も本児の心の成長の証しであった。自己の対象化とは自分を外側から見る事であり、これは相手の立場に立つ事、今流行りの言葉で言えば“国民目線に立つ”という事である。自己の対象化が出来るようになった事が、自己の行動を制御してやり過ぎる事無く、また引き過ぎる事も拗ねる事も無く、担任のみならず級友との上手な交渉駆け引き妥協を生み出し、校内適応行動の増加に繋がった。

行動の振幅の激しい性格から穏やかに他人や環境と交渉できるような性格に変貌する事が出来た本児、本児とよく付き合い切った特別支援教員 B 先生は、それぞれ“表彰状！”に値する発達を發揮した。